〔研究ノート〕

# 漢長安城西南考

## ――漢長安都城圏研究における可視化を試みて――

陳　　力

### はじめに

1950年代に漢長安城の考古学的調査に最初に携わった王仲殊氏は漢長安城を研究するプロセスについて,「先に城壁と城門を究明する。その後の段取りとしては政治的な中心である各宮殿を発掘し，そして城内にある道路・手工業区・商業区・官府・貴族邸宅と一般市民の居住区までを発掘し，最後に城外にある離宮別館と宗廟や陵墓まで拡大していく。」という展望を示した[1)]。中国の学界では，2000年代に入っても基本的にこの方針は変わっておらず，劉慶柱氏は「漢長安と漢文化――漢長安城考古五十周年記念国際シンポジウム」における基調講演「漢長安考古50年と漢代考古学」の中で，この発掘・研究計画を再度強調し，将来の漢長安城の発掘について「しばらくの間，漢長安城の発掘と考古学研究の中心は長楽宮・明光宮，市場と居住遺跡，城内の宗廟遺跡，前漢以前の長安と漢～隋間の長安，漢の上林苑遺跡を中心にして展開していくが，漢長安城の市場と居住遺跡研究の重要性・必要性及び現在におけるこの分野の研究の手薄状態からみれば，この方面の調査にも早く着手したい」と述べた[2)]。1980年代以後の漢長安城の発掘経過及び研究史をみても，漢長安城に関する研究は基本的にこの方針に沿って展開されているといえる。

一方，1980年代に楊寛氏が中国古代都市の「坐西朝東」説を提唱した。楊氏は漢長安城に関して，現在確認されている漢長安城は宮城の遺跡であり，その東及び北に郭城があり，文献に記録されている漢長安城の居住区と東市，西市などの市場はその郭城内に存在していたと主張した。同時に，この主張に基づく復元図も公表した[3)]。劉慶柱氏は楊氏のこの説に反論し，考古学資料を用いて漢長安城の東部と北部には郭城が存在しないことを指摘した。現在では，中国の考古学関係者のほとんどは楊氏の説に否定的な考えを持っているが，この論争は，様々な面で重要な意義を有した。この論争によって，多くの研究者たちの視野は漢長安城の内部から漢長安城の郊外まで広がったのである。

漢長安城郊外の西南エリアについて，学者たちがまず，注目したのは，漢長安西南エリアにおける河川や水路の復元であった。1956年に黄盛璋氏は現地調査と当時の考古学資料・文献記事を照合し，1950年代の西安の給水問題を意識し漢長安城西南の古代水系を復元した[4)]。その後史念海氏がこのエリアの研究成果を多数発表した。1989年には辛徳勇氏が漕渠に関する研究を行い[5)]，1990年に呂卓民氏が西安の南部を源とする交水と潏水の歴史的変遷を明らかにした[6)]。さらに馬正林氏が1994年に西安西部と南部の河川と人工水路を復元した[7)]。また1990年代からの李令福氏の研究は西安周辺の河川と人工水路の復元に大きく貢献している[8)]。

漢長安の西南の研究において，交通路も重要な論点の一つである。後述するように，辛徳勇・李之勤両氏の研究はその代表的なものである。なかでも，渭水及びその支流に存在していた橋は特に研究者が注目している問題であり，多くの研究成果が公表されている[9)]。

1990年以降，漢代上林苑に関する研究も多くなされ，上林苑の範囲[10)]，文献による上林苑内部の宮殿の分析，上林苑にある植物と生態，上林苑と漢長安城との関係などについて議論が集



無断転載禁止

中している。

漢長安周辺の重要な歴史地名の比定についても重要な研究成果を出している。特に細柳倉及び西渭水橋などの位置が確定された。

考古学的研究成果としては，上林苑内部の建築，昆明池，建章宮，直城門，泬水古橋，沙河古橋，西渭橋，漢長安城西南エリアの一部の道路などの発掘調査と研究が挙げられる。また礼制建築に関する研究も少なくない。今後の漢代長安西南部の可視化作業は，以上に挙げた多様な研究成果に基づいて，展開していくことになるだろう。

さて，中国古代都市の可視化については，すでにシンガポール国立大学王才強氏によるコンピューター・グラフィック技術を駆使した唐長安城の復元研究がある。しかし，王氏の研究目的とその範囲は本稿のそれとは大きく異なる。第一に，本稿で取りあげる漢長安西南部は，唐長安城より遥かに範囲が広いうえに，史料は少ないため，詳細な復元は不可能である。第二に，本稿の目的は漢長安都城圏における可視化であり，あくまでも漢長安城を中心とする都城圏を構成する各陵邑や県城の間の関係，人と物の流動などから，漢長安都城圏の範囲を分析し，規定することを目下の課題とする，これからの研究に可視化の資料を提供し，そこから漢長安都城圏の研究になんらかのヒントを提供する，ということを最終的な目標としている。

だが，本稿の研究目標と類似している方向性をもつ成果も，すでに複数ある。例えば『西安歴史地図集』，『中国文物地図集・陝西分冊』の該当部分や上述した先行研究に付されている地図は，いずれも漢長安都城圏に関わるビジュアル的な資料と見なせる。

しかし，これらの成果にもいくつかの問題点がある。まず，これまでのほとんどの漢長安に関わる復元図に盛り込まれている情報はわりに単一である。例えば，河川の復元図には漢長安城の城壁が表記されているが，離宮などの重要建築との位置関係は明記されていない。道路の復元図には考古学的に発見された漢代遺跡が記されていないため，道路と宮殿・官署・集落などの位置関係が明瞭ではない。一部の総合的歴史地図では，情報量がやや少ないという欠点がある。また考古学関係の遺跡図には，複数の時代の遺跡が同一地図上記され，加えて古代の地理情報ではなく，現代の地理情報などしか表記されていないという問題がある。最後は地図の正確さの問題である。この方面の多くの復元図は「示意図」的なものである。本稿ではこのような問題点を意識して，まずはこれまでの漢長安西南の先行研究を，漢代の地理的要素を総合的に示している地図上に注記していく。それによって漢代長安西南部の状況を視覚化し，次の研究のための基盤としたいとおもう。

漢長安西南部については，詳細な地図と衛星写真がある。大縮尺地図は旧陸軍測量部が作成した五万分の一地図（便宜上，以下陸測地図と呼ぶ）と旧ソ連製十万分の一地図が使える。1960年代から1970年代に作成された五万分の一地図もあるが，さまざまな理由でこれは研究に使用できない。道路情報や地名が記載され，さらにそれは1900年代初期に遡ることができることから，本稿で陸測地図をベースとして，各種の復元図と『中国文物地図集・陝西分冊』とを照合しながら，可視化作業を進めていきたい。

ただ，西安周辺の陸測地図は測量の時期が早く，どのような測量法で行なわれたのかがわからない。おそらく，早期歩行測量で仮地図がつくられ，1930年代後半航空写真による校正が行なわれたと推測される。そのため，正確さにはさまざまな問題点があるが，1960年代の衛星写真と照合して一致する部分が多いので，古代史研究にとって耐えられる正確さであろう，陸測地図に正確さのばらつきがあり，地図作製する際に，一定の変形が生じてしまう。そもそも各復元図や文物地図集にも正確さが低いものが存在するため，復元図に絶対的な正確さを求めることは不可能である，故に，本稿では，古代史研究に耐えうると判断される精度での復元図を目指したい。



無断転載禁止

## Ⅰ　河川・湖池・人工水路の復元と可視化

前述のように，漢長安西南部における河川・湖池・人工水路について，黄盛璋，呂卓民，馬正林，李令福諸氏が全体的な復元を試み（図１～図４），さらに辛徳勇氏はこのエリアにある人工水路について詳細な分析と復元を行なった。劉慶柱氏は考古学調査による建章宮周辺の水路図を提示している[11]。さらに最近，昆明池に関する詳細な考古学調査が行なわれた。これらの研究にはいずれも復元図が付されているが，いたって概念図的なものもある。そのなかで呂・馬・李三氏が作成した復元図には見解の違いがあるものの，精度はわりに高い（図２，図３，図４）。

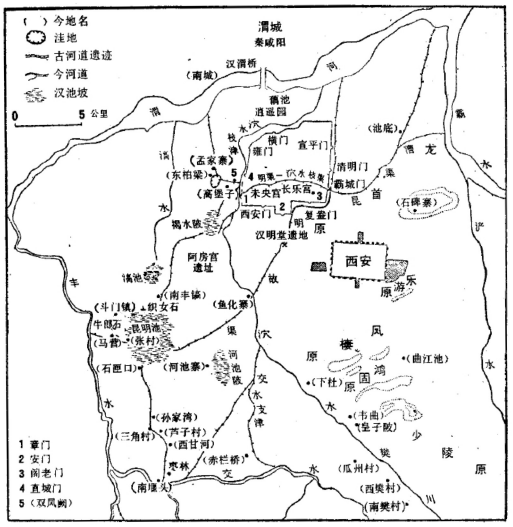


**図１　黄盛璋氏の復元図**

出典）黄盛璋「関於『水経注』長安付近復原的若干問題」『考古』1961年第６期及び「西安城市発展中的給水問題及今後水源的利用与開発」『地理学報』1958年第４期。『地理歴史論集』北京：人民出版社，1982年６月所収。

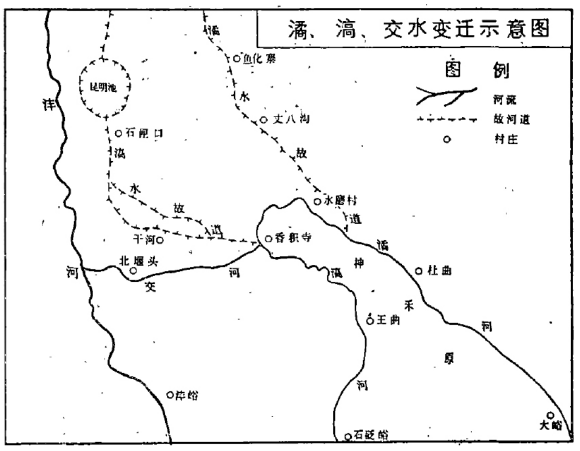


**図２　呂卓民氏の復元図**

出典）呂卓民「西安城南交潏二水的歴史変遷」『中国歴史地理論叢』1990年第２期。



無断転載禁止

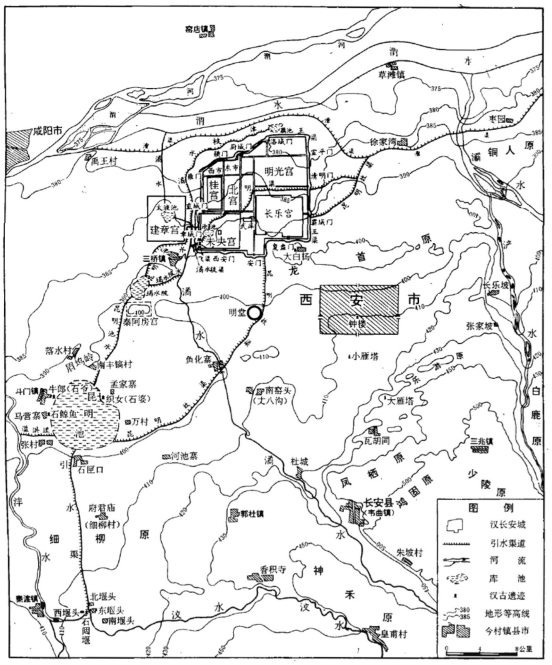


**図3　馬正林氏の復元図**

出典）馬正林「漢長安城総体布局的地理特徴」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』1994年第4期。

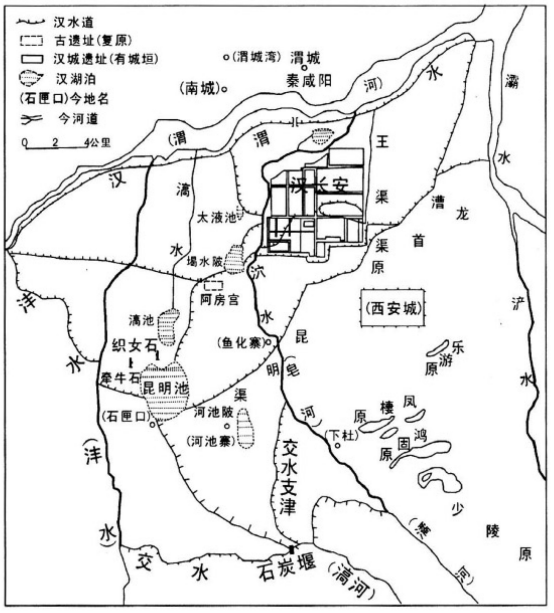


**図4　李令福氏の復元図**

出典）李令福「漢昆明池的興修及其対長安城郊環境的影響」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』2008年第4期。



無断転載禁止

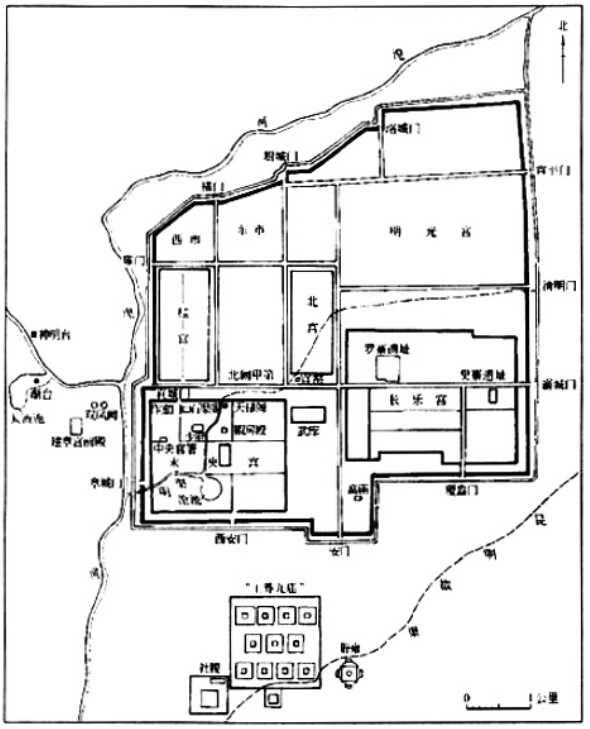


図5　劉慶柱氏の復元図

出典）劉慶柱・李毓芳『漢長安城』北京：文物出版社，2003年。

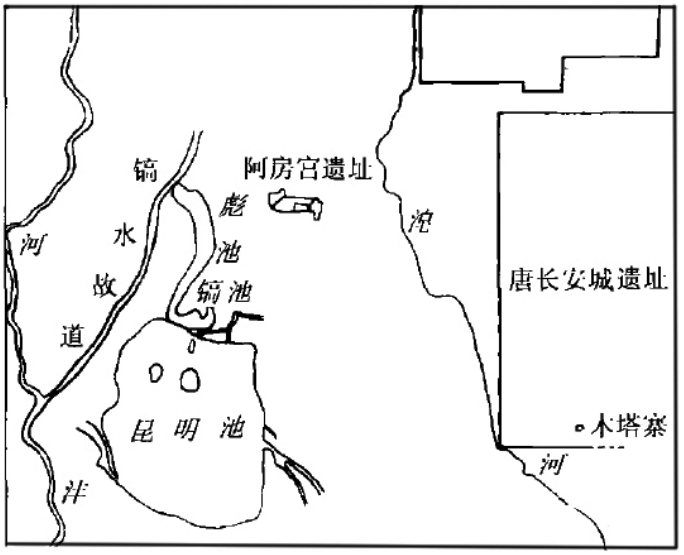


図6　昆明池の考古発掘

出典）中国社会科学院考古研究所「西安市漢唐昆明池遺址的鑽探与試掘簡報」『考古』2006年第10期。



無断転載禁止

### 1．自然河川の復元

漢長安西南部にある自然河川について，研究者の間では細かい意見の違いがある。例えば滈水の澧池以南部分の方向と位置，昆明池が完工してからの滈水の上流の存在についてである。李令福氏は，昆明池が造られるまで，滈水の上流部分はおおよそ澧池・鎬池の南に位置すると考えているが[12]，滈水は澧池と合流し，昆明池の完成後もなお存在していた意見もある。これらの意見の相違は絶対的に相反するものではなく，細部の復元に関する意見の違いである。自然河川に関して，かつて沙河古橋は灃水故道にある橋なのか，それとも西渭橋なのかということについて論争があったが，現在では一般的に，この橋は西渭橋ではなく，灃水故道の上にある橋，あるいは漕渠の上にある橋と認識されている。つまり，漢代の漢長安の西部にある渭水は沙河古橋あたりにあるのではなく，今の両渡寺と文王咀の間にあると考えられ，特に馬家寨で西渭橋の遺跡が発見されてからは，この論争も終焉に入った。

### 2．人工水路の復元

一方，人工水路については，学者の間に意見の相違が多い。それは次のいくつかの問題に集中している。まず，昆明池の水源と進水口について，黄盛璋氏は昆明池の水は主に昆明池の南にある南堰頭付近から交水の水を北の方に引いたと指摘し，馬正林氏もほぼ同じ意見である。呂卓民氏と李令福氏はこの見解を反対し，昆明池の水は交河上流の石炭堰あたりから，西北方向の水路を造って水を昆明池に送ったと考えている。2006年のボーリング調査によれば，昆明池の南側ではなく，その東南方向に進水口がある。考古学的資料は呂氏・李両氏の考えを裏付けるが，まだ黄・馬両氏の意見を完全に否定するまでには至っていないと思われる。

そのほか，漕渠に関する復元にも大きな論争があり，漕渠の位置について大きく分けて北コース・南コースの二種類の考え方がある。馬正林氏はそれが渭水沿いにあると想定しているが[13]，辛徳勇氏は両渡寺付近の渭水東岸から南東方向へ流れ，漢長安城付近で掲水陂に入り，更に漢長安城の南にある城壕に入り東へ流れると復元している[14]。李令福氏も同じ見解を示している[15]。

### 3．昆明池周辺の復元

『漢書』巻6顔師古引臣瓚注に，「（昆明池）在長安西南，周回四十里」とある。2006年の発掘によれば，遺跡の周囲は17.6キロである。黄盛璋氏は1960年代昆明池の研究を行い，基礎的な成果を発表した[16]。その後，胡謙盈氏は考古学的な分析を行なった[17]。1980年代以降，呂卓民，辛徳勇，李令福，郭声波諸氏などがそれに関連した研究を行なった[18]。特筆すべきは2006年公表された中国社会科学院考古研究所による昆明池に関する調査である。この調査によれば，昆明池には二つの進水口がある。東岸南部の万村の西側220メートルのところにある進水渠の規模がもっとも大きく，幅は160メートルもあり，この進水渠のもっとも広いところは420メートルにも達する。この進水口の北側570メートルのところに幅25メートル前後の進水渠があり，おそらく前述した進水口の分枝であろうと推測する。この考古調査では，これ以外の進水渠は発見されなかった。

この調査のなか，4つの出水渠が発見された。昆明池西岸の出水渠は堰下張村北東にある北西方向に流れ，灃水故道か滈水故道に入る。昆明池東岸には出水渠がない。昆明池の北岸には3つの出水渠がある。そのなかの落水村にある出水口は滈池に繋がる。昆明池北岸の2番目の出水渠は南豊村の西南にあり，その幅は20～50メートル前後，3つ目の出水渠に入る。その3つ目の出水渠は大白村西約270メートルにあり，その幅は40メートル前後であった。この用水路の底は，大きな玉砂利で舗装されている。

ところが，上述した2008年の李令福氏による詳細な昆明池周辺の復元図には，2006年の発掘成果をその復元図に反映させていないようである。李氏は昆明池の主な進水渠が昆明池の南西



無断転載禁止

**図７　昆明池周辺の復元**

出典）旧日本陸軍測量部地図をベースにして，図４・図６及び注14辛徳勇氏の研究を参考にして筆者が作成。

にあると復元し，昆明故渠の出口は昆明池の東岸にあると考えており，これは2006年発掘の結果と矛盾する。

そこで，上述した諸研究を参考しながら2006年の発掘結果を反映させて，新たに復元したものが図７である。

## Ⅱ　道路及び関連施設の復元

漢長安周辺の道路に関する研究は非常多い。ここでは主に地図などのビジュアル的な資料を提示した研究成果を踏まえて作業を行ないたい。漢長安の西南部の陸上交通路に関する成果において，詳細に，かつ地図も提示したのは辛徳勇氏の「西漢至北周時期長安付近的陸路交通—漢唐長安交通研究之一」である[19]。『西安歴史地図集』及び李之勤氏も漢長安西部の交通状況の地図を作成している[20]，また喩曦・李令福両氏の長陵周辺の交通を研究した成果にも，漢長安西部の交通状況が地図に表記している[21]。

これら諸氏の研究によれば，漢の武帝前後になると，漢長安西南部の交通状況はおおよそ次のようであった。

まず，雍門（漢長安城西壁北側第一門）から西方に伸びる道がある。便門（漢長安城西壁南側第一門，章門もしくは章城門とも呼ばれる）から西への道路があり，これは漢の長安城から西へ行く際のもっとも重要な道路である。この２本の道路は合流し，更に西へ伸びて便橋（西渭橋）で渭水を渡り，茂陵及び西方に行くもっとも重要な道である渭北道につながる。

また，便橋付近の渭水東岸から南下し，灃水を渡り，戸県と周至を経由して『石門頌』に書かれた囲谷道（後の駱谷道）に入り，漢中にはいる渭水南岸の道があったと考えられる。

このほかに，劉慶柱氏によれば，建章宮の東，直城門の南西にある双鳳闕の間に幅40メートルの南北方向の道路がある[22]。汧水古橋はこの道路遺跡の真南にあり，双鳳闕と汧水古橋の間にこのような南北方向の直線道路が存在すると考えられている[23]。

周知のとおり，漢長安の西部と南部には上林苑があり，この上林苑について「繚以囲牆，四百余里」という（班固『西都賦』）。上述した道



無断転載禁止

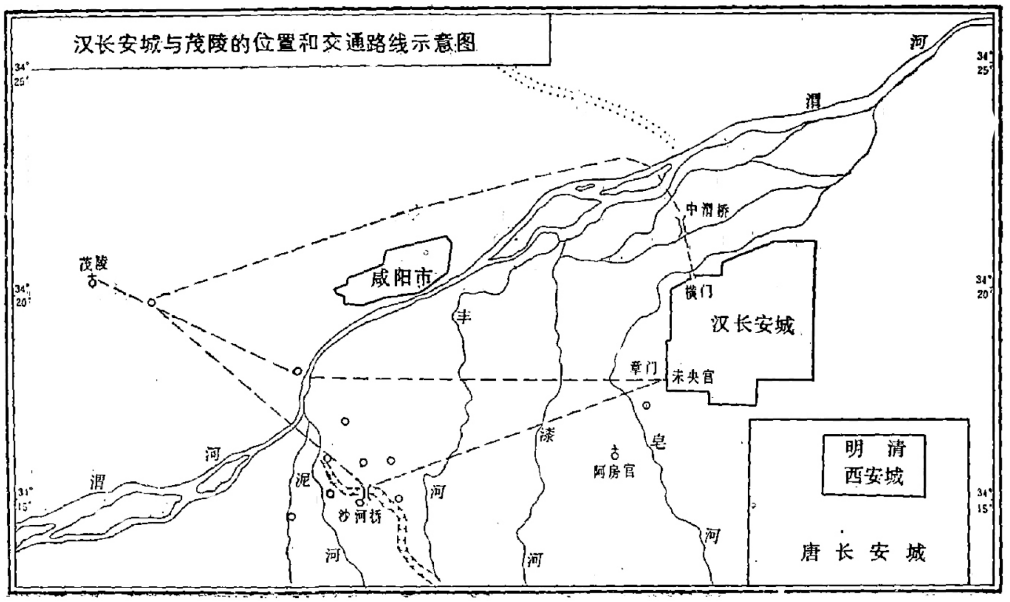


図8　李之勤氏の復元図

出典）李之勤「沙河古橋為漢唐西渭橋説質疑――読「西渭橋地望考」」『中国歴史地理論叢』1991年第3期。

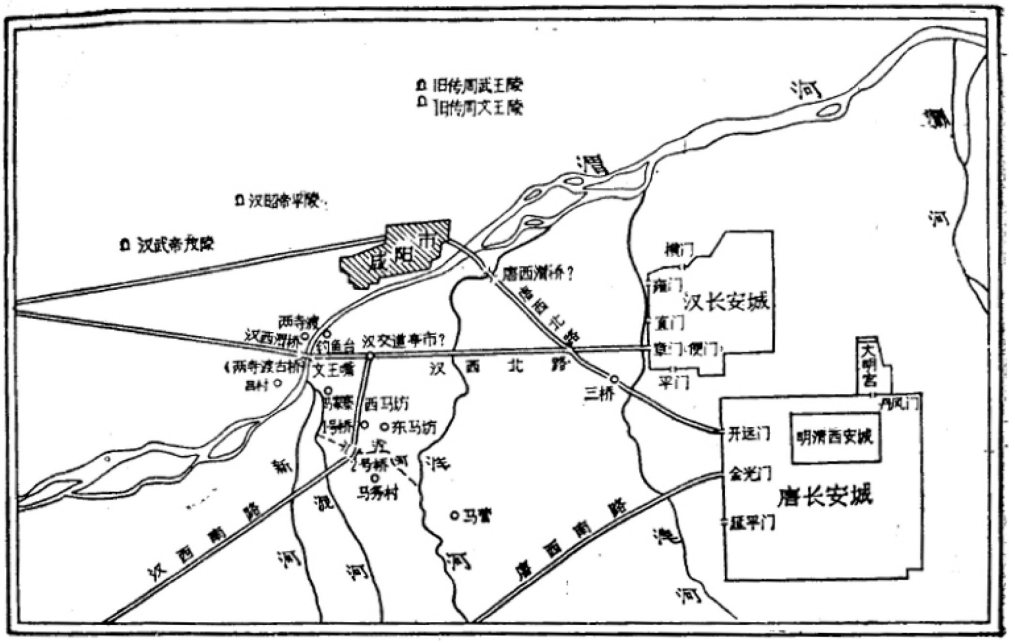


図9　辛徳勇氏の復元図

出典）辛徳勇「西漢至北周時期長安付近的陸路交通――漢唐長安交通研究之一」初出『中国歴史地理論叢』1988年第3期,『古代交通与地理文献研究』北京：中華書局, 1996年。



無断転載禁止

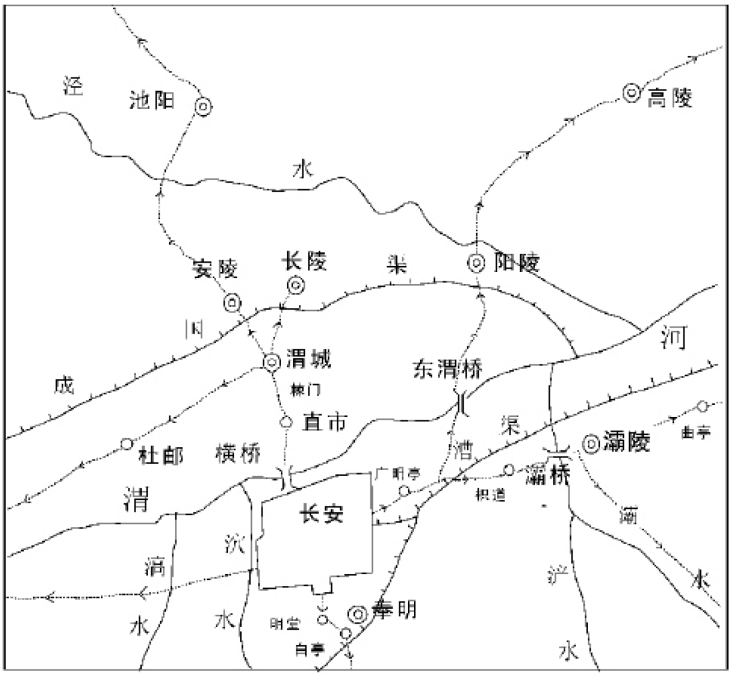


**図10　李令福氏の復元図**

出典）喩曦・李令福「西漢長陵的設置及其影響」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』2012年第3期。

路はいずれも上林苑のなかを通っているので，道路の両側には壁があったと考えられる。直接に指し示す史料はないが，ここからさらに次のような推測も可能であるとおもう。すなわち，上林苑には一般居住区は存在せず，上林苑関係者が利用する道路はあるが，いわゆる一般的な民間用の交通路が少なかったと考えられる。

ところで，現在まで学界では注目されていない漢長安西南部の道路がある。例えば，『九章算数』均輸の問九に，

> 今有程伝委粟（輸），空車日行七十里，重車日行五十里。今載太倉粟翰上林，五日三返。問，太倉去上林幾何。答曰，四十八里十八分里之十一。

とある。また『史記』巻30平準書集解に，

> 『漢書』百官表，「水衡都尉，武帝元鼎二年初置，掌上林苑，属官有上林均輸・鐘官・弁銅令。」然則上林三官，其是此三令乎。

とある。『漢書』巻19上百官公卿表上に，

> 水衡都尉，武帝元鼎二年初置，掌上林苑，有五丞。属官有上林・均輸・御羞・禁圃・輯濯・鐘官・技巧・六厩・弁銅九官令丞。

とある。前引『史記』平準書集解は均輸を上林三官の一つとしているが，陳直氏はそれを否定し，鐘官・弁銅・技巧を上林三官としている[24]。上林苑にある水衡都尉に所属する諸官の所在地はおおよそ今の戸県兆倫村西（鐘官）・窩頭寨・相家巷付近にあるとされて[25]，前引した『九章算数』の史料でわかるように，上林苑にある粟を貯蔵する倉庫は，おそらく均輸に所属し，太倉からこの倉庫まで「四十八里十八分里之十一」の距離がある。『三輔黄図』巻6に，

> 太倉，蕭何造，在長安城外東南。

とあり，漢長安城の東南からみれば，相家巷付近の遺跡はあまりにも距離が近すぎるが，逆に戸県兆倫村の遺跡では遠すぎる。陸測地図から漢長安城東南から窩頭寨までの直線距離は36漢里前後であり，後述する道路の屈折を計算に



無断転載禁止

入れれば，40数漢里になる。これは『九章算数』の記載とほぼ同じなので，窩頭寨は水衡都尉関係の遺跡である可能性が出てくる。このような推測が正しければ，太倉から窩頭寨まで連繋する幅の広い道路があるはずである。だが，この道路が漢長安城内を通過していた可能性が低いとおもう。なぜなら，漢長安城の西壁の城門内には，章城門の中に未央宮があり，直城門の外に建章宮がある。したがって雑役の車両が通行していたとは考えられないのである。さらに城内の道を利用するには，馳道などに関して煩雑な規定があり，皇太子すらよく迂回して目的地へ行くような状況であったので[26]，多数の食料運輸車両が城内の道路を利用すれば迂回せざるをえないので，運搬の効率が非常に悪くなる。これらの要素と史料に記された道路の距離などを照合して統合的に考えると漢長安城の外側の城壁の南壁沿いに，東西方向の交通路があった可能性がある。また，漢長安西南にある郎池宮や昆明池水の下流の池を避けるため，この交通路は漢長安城の南西角で北上すると思われる。窩頭寨遺跡は便門（章城門）とほとんど同じ東西方向の直線上にあり，便門から西渭橋まで伸びる大道は窩頭寨の南側を通過している。よって，『九章算数』に記載されたこの交通路は漢長安の西南隅から北上し，最終的に便門―西渭橋大道と合流したと推測できる。

さて，上林苑の主要範囲について，『三輔黄図』，『上林賦』，『羽猟賦』はいずれも渭水南岸から南山までと記録している。しかし，『中国文物地図集・陝西分冊』に見える現長安区と戸県の漢代遺跡の分布状況をみれば，牙道村遺跡から東の普仙寺・高廟村・南沈家橋村までで一線を引けば，その南側には多くの漢代墓と漢代遺跡があるので，上林苑の範囲南山までは届かないのではないかと思われる。そして，これらの遺跡・墳墓と，戸県と下杜城とを繋ぐ道路が存在していた可能性がある。もちろん，これを実証するために，更なる考古学的な資料による裏付けが必要であり，今後の調査の進展に期待したい。

## Ⅲ　可視化資料を利用した漢長安城西郊の亭と道路システムの復元

西安付近の陸測地図のなかから，西安・草灘・斗門鎮・咸陽・戸県の該当部分を繋ぎ合わせて底図とし，前述した諸水路の情報を加え，さらに『中国文物地図集・陝西分冊』及び公表された一部の遺跡情報を追記すると，以下のことが確認できる。

まず，建章宮前殿遺跡―鯢灘遺跡―老戸寨―田家堡―安谷遺跡は，多少の南北のズレがあるが，ほぼ一本の直線上に位置している。建章宮の西側―鯢灘遺跡―老戸寨―田家堡の間の距離はほぼ同じである。便宜上，この直線を**線 2** と呼ぶ。

第二に，紀楊寨遺跡―西張遺跡―馬寨遺跡の場合でも，各遺跡は多少の南北方向のズレがあるが，やや東西方向の直線に位置している。この直線を**線 3** と呼ぶ。

第三に，雍門遺跡はほぼ火焼寨遺跡と東西方向の直線上に位置している。この直線を**線 1** と呼ぶ。

第四に，**線 1** と**線 2** と**線 3** の間の距離はいずれもほぼ 2 キロあまりで，誤差はあるが，漢代の五里と近似する距離である。

**線 1** と**線 3** における遺跡の数は少なく，**線 2** には五カ所の遺跡がある。これは単なる偶然とは考えられない。

以上のような遺跡の状況から，漢長安西部の亭と交通システムを以下のように復元してみたい。

### 1．雍門路の復元

辛徳勇氏は漢長安城から茂陵までの交通路を検討し，「章城門は便橋と相対しているため，出入りが便利であったというが，城門内には未央宮があり，交通を妨げることになる。したがって一般の交通ではやはり，西壁北側一番目の雍門を利用することになる。雍門の中は市民居住区なので，漢長安城から出入りする場合，もっとも便利である。このため，雍門は西城門とも呼ば



無断転載禁止

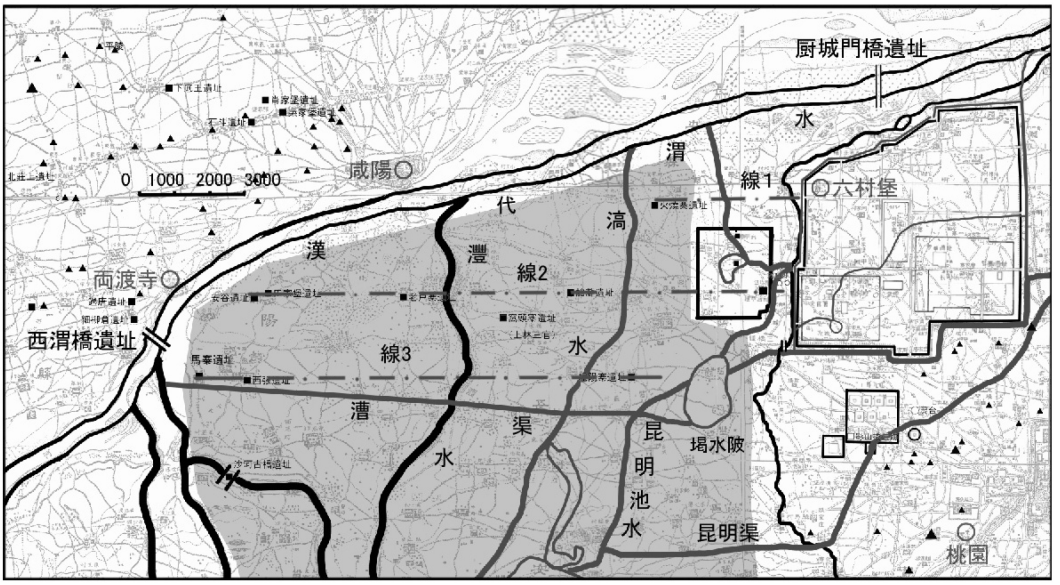


**図11　漢長安西部の漢代遺跡の分布**

出典）旧日本陸軍測量部地図をベースにして，『中国文物地図集・陝西省分冊』を参考にして筆者が作成。

れていた」と指摘している[27]。この西渭橋を経由して渭水北岸の渭北路と呼ばれる幹線道路に繋がる道路は，便宜上「雍門路」と呼ばれ[28]，章城門から西渭橋を経由して漢西北路に繋がる道路は「便門路」と呼ばれた。

しかし，「雍門路」がどのように西渭橋まで続いていたかに関して，史料に具体的な記載はない。間接的な史料及び出土史料から，少しばかり推測することができる。まず，雍門は西渭橋の北東方向にある。このため，雍門から西渭橋への道路は真東西方向に一直線の道路にはならず，屈折もしくは斜めの部分があったと想定できる。

雍門を出て西へ行くと，「雍門路」沿いにまずあるのは函里であり，さらに西に行くと，少昊白靈蓐收畤（王莽期，宣帝期は太白と呼ぶ）という重要な礼制の場がある。姜波氏は，その場所は雍門の外，今の坡上村と二府村の南のエリアにあったと推測している[29]，もしこの推測が正しければ，雍門道はこの礼制建築の近辺を通過していたはずである。

『三輔黄図』引『三輔旧事』に，

又於（建章宮）宮門北起円闕，高二十五丈，上有銅鳳凰。

とあり，また『関中記』を引いて，

建章宮円闕，臨北道。

とある。ここには「臨」という言葉が使われているので，つもりそれは北道がこの闕から出たという意味ではなく，その北側は東西方向の道と隣接することを示すことと理解される。この道は直城門から西へ行く道ではないだろう。なぜなら，直城門の真西に建章宮内にあるとされている太液池があり，更に建章宮の建築物とされる神明台[30]が直城門の北西方向の今孟村にあるので，建章宮の北面の玄関である円闕はさらに神明台の北にあったはずである。すなわち，この文献にある「北道」は「雍門路」を指している可能性が高い。

「雍門道」は建章宮北闕の北側を走り，さらに西に進むと火焼寨遺跡に辿り着く。この漢代の遺跡は面積がおおよそ90×90メートルで，性質は不明である[31]。ここからさらに西に進むと滈水に至る。直接的な史料はないが，ここ滈水の東岸で雍門路は南西方向に曲がったと推測され



無断転載禁止

る。その理由としては，まず上林苑は皇室の苑囿で，厳密の管理下に置かれている。もし多くの道路が上林苑を通過したとするなら，複数の道路と道路両側の壁によって，皇室苑囿としての上林苑は取りちぎられることになる。皇権本位の武帝時代以後においては，このような状況はやはり想像しにくい。最後，地形の面からみれば，雍門付近の海抜はおおよそ381メートル前後であり，火焼寨付近はおおよそ380メートル前後，火焼寨から真西に進むと，海抜は397メートル前後になる。しかし，西渭橋遺跡の海抜は388メートルである。この道路が火焼寨付近で西南を曲がると，ほぼ385メートルの等高線に沿う状態になり，道路の起伏は少ない。少し遠回りしてでも起伏の少ない道路を造ることは，前近代道路の特徴の一つである。また，以下に述べる交通路と亭の関係からみても，雍門路は火焼寨で南西方向に曲がる可能性が高い。

火焼寨の西南に鹼灘遺跡が発見されている。建章宮の東西南北には，それぞれ宮門（司馬門）があり，前述したように東の宮門から西へ伸びる道路がある。この道路はちょうど鹼灘遺跡と同じ東西方向の直線上にある。少しズレはあるものの，この東西直線上にさらに老戸寨遺跡・田家堡遺跡がある。このような一致は単なる偶然とは思われない。おそらく雍門路は，鹼灘遺跡で建章宮から出てくる道路と合流し，前述した諸遺跡を経由して，西渭橋に辿り着くのであろう。

## 2．漢長安西部の道路・考古資料からみた長安周辺の亭

これまでにも，漢代の亭に関する研究は注目されており，周知のようにその研究成果も多い。漢長安城内の亭に関しては『漢官六儀』巻下に，

> 長安城方六十里，経緯各十五里，十二城門，積九百七十三頃，百二十亭。

とある。しかし，これは城内にある都亭に関する記載であり，漢長安城郊外の亭に関する記載は極めて少なく，文献に白亭・交道亭などの亭名が散見するものの，亭に関わる制度は不明である。

漢長安城付近の亭については古賀登氏の研究があるが[32]，学界ではその学説は「独得的」と評価されている[33]。現在多くの研究者は前漢時期の亭には都亭と郷野と辺境の亭があると考えている[34]。かつて王毓銓氏が主張した「十里一亭」にある「里」とは距離のことであって，行政組織の里ではないことは今では多くの学者に受けられている[35]。郷野の亭がおおよそ十里ごとに設置されていることは木簡史料などでも証明されている[36]。

前漢時代の上林苑の主要部には当然ながら官的施設以外の民居などは存在しないはずである。すなわち，西渭橋―章城門一線の北側に窩頭寨遺跡・鹼灘遺跡・老戸寨遺跡・田家寨遺跡・安谷遺跡・火焼寨遺跡などの居住遺跡が発見されているが，これらの遺跡は上林苑の範囲内にあるので，官的施設であった可能性が高い。

前述したように，これらの遺跡のなかで，鹼灘遺跡・老戸寨遺跡・田家寨遺跡はほぼ東西方向の直線上にあり（安谷遺跡はやや南にずれる），その東の延長線上には建章宮前殿南側の大通りがある[37]。さらに，建章宮の西門と考えられるところから鹼灘遺跡まで，鹼灘遺跡・老戸寨遺跡・田家寨遺跡と安谷遺跡の間の距離はほぼ4000メートル強で，これは漢代の十里に相当する距離である。まだ，雍門から火焼寨遺跡まで，火焼寨遺跡から鹼灘遺跡までの距離も4000メートル前後である。これもけっして偶然ではなく，前述した「十里一亭」の制度から推測すれば，おそらく，これらの遺跡は「雍門道」にある亭と関係があると思われる。

安谷遺跡は一般に交道亭だと考えられている。『太平御覧』巻827資産部7に，

> 『漢宮殿疏』曰，交門市（在渭橋北頭也）・孝里市（在雍門東）・交道亭市（在便橋東）・細柳倉市（在細柳倉）。

とある。安谷遺跡は章城門と西渭橋を結ぶ直線の北側にあり，「便門路」がこのような曲折をすると遠回りになる。むしろ，いわゆる交道亭



無断転載禁止

は，沙河古橋を経由する戸県・周至に通ずる漢西南路と雍門路との合流地点であったと考える方が，より合理的である。つまり，上林三官などの遺跡を経由して章城門と西渭橋を繋ぐ便門路は祭祀・政治的な性格を有する道路であり，曲折があって複数の亭を経由して西渭橋に行く「雍門路」はより経済的・庶民的な道路であったと考えられる。

## おわりに

本文は陸測地図を底図として，そこに様々な情報を付加することによって，漢長安の西南エリアの可視化を試みた。さらにより詳細な可視化を行なうために，「カシミール 3D」などのソフトと標高データを用いて，標高付き地図や展望図も作成することも今後は可能である。USGS（アメリカ地質調査所）は全世界の地形を30秒メッシュ相当で表現したデータを無料で提供しているが，漢長安城周辺の地形は割に平坦なので，30秒メッシュはやや荒いデータになるという問題点がある。そのためには，まずより詳細な標高データの公開が待たれ，それによって古代都市研究における可視化が発展することを期待するものである。

［付　記］

本稿は平成24年度～平成26年度科学研究費助成事業（基盤研究（B））「魏晋南北朝時期主要都城の「都城圏」社会に関する地域史的研究」（課題番号24320146研究代表者：相愛大学教授 中村圭爾）の研究成果の一部である。

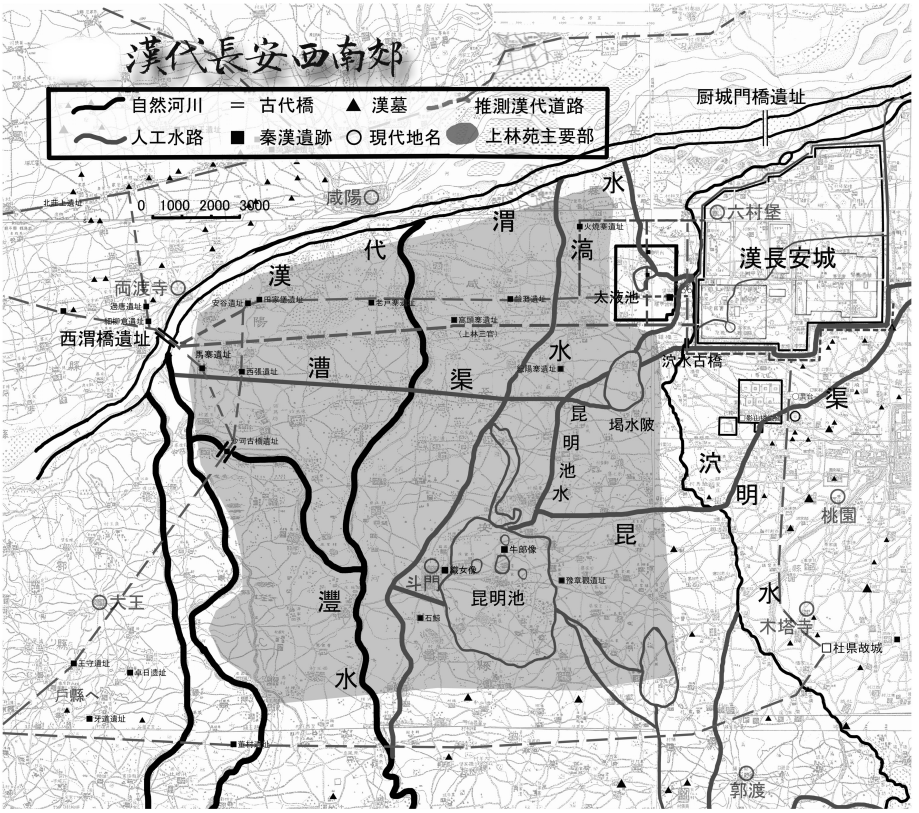


図12　漢代長安西南郊

出典）上述諸研究及び考古資料を利用し，旧日本陸軍測量部地図をベースにして筆者が作成。



無断転載禁止

## 注

1）王仲殊「漢長安城考古工作的初歩収穫」『考古通迅』1957年第5期。
2）劉慶柱「漢長安城考古的回顧与瞻望―紀年漢長安城考古半個世紀」『考古』2006年第10期。
3）楊寛「西漢長安布局結構的探討」『文博』1984年創刊号。『中国古代都城制度史研究』上海：上海古籍出版社1993年12月，126ページ所収。
4）黄盛璋「関於『水経注』長安付近復元的若干問題」『考古』1961年第6期及び「西安城市発展中的給水問題及今後水源的利用与開発」『地理学報』1958年第4期。『地理歴史論集』北京：人民出版社，1982年6月所収。
5）辛徳勇「漢唐期間長安付近的水路交通―漢唐長安交通地理研究之三」『中国歴史地理論叢』1989年第1期。
6）呂卓民「西安城南交漪二水的歴史変遷」『中国歴史地理論叢』1990年第2期。
7）馬正林「漢長安城総体布局的地理特徴」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』1994年第4期。
8）李令福「漢昆明池的興修及其対長安城郊環境的影響」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』2008年第4期などを参照。
9）辛徳勇「西漢至北周時期長安付近的陸路交通―漢唐長安交通地理研究之一」『中国歴史地理論叢』1988年第3期。李之勤「沙河古橋為漢唐西渭橋説質疑―読「西渭橋地望考」」『中国歴史地理論叢』1991年第3期。「漢長安城汶水古橋遺址発掘報告」『考古学報』2012年第3期。梁雲「漢渭河三橋的新発見」『中国国家博物館館刊』2013年第4期など。
10）王社教「西漢上林苑的範囲及相関問題」『中国歴史地理論叢』1995年第3期など。
11）劉慶柱・李毓芳『漢長安城』北京：文物出版社，2003年。
12）李令福「漢昆明池的興修及其対長安城郊環境的影響」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』2008年第4期，「論西漢長安城都市水利」『中国古都研究』第十九輯。中国社会科学院考古研究所「西安市漢唐昆明池遺址的鑽探与試掘簡報」『考古』2006年第10期を参照。
13）馬正林「渭河水運与関中漕渠」『陝西師範大学学報』1983年第4期。
14）辛徳勇「漢唐期間長安付近的水路交通」初出『中国歴史地理論叢』1989年第1期，『古代交通与歴史地理文献研究』北京：中華書局，1996年所収。
15）李令福「論西漢関中平原的水運交通」『唐都学刊』2012年第2期。
16）黄盛璋「西安城市発展中的給水問題及今後水源的利用与開発」，初出『地理学報』1958年第4期，『歴史地理論集』北京：人民出版社，1982年所収。
17）胡謙盈「豊鎬地区諸水道的踏察―兼論周都豊鎬的位置」『考古』1963年第4期。
18）辛徳勇「西漢時期陝西航運之地理研究」『歴史地理』第二十一輯。
19）辛徳勇「西漢至北周時期長安付近的陸路交通―漢唐長安交通研究之一」初出『中国歴史地理論叢』1988年第3期，『古代交通与地理文献研究』北京：中華書局，1996年所収。
20）李之勤「沙河古橋為漢唐西渭橋説質疑―読「西渭橋地望考」」『中国歴史地理論叢』1991年第3期。
21）喩曦・李令福「西漢長陵的設置及其影響」『陝西師範大学学報（哲学社会科学版）』2012年第3期。
22）劉慶柱・李毓芳『漢長安城』北京：文物出版社，2003年。
23）西安市文物保護考古研究院「漢長安城汶水古橋遺址考古発掘報告」『考古学報』2012年第3期。
24）陳直『漢書新証』西安：陝西人民出版社，1981年。
25）党順民・呉鎮烽「陝西戸県兆倫漢代鋳銭遺址調査報告」『中国銭幣論文集（第四輯）』北京：中央金融出版社，2002年9月，240-244ページ。
26）『漢書』巻10成帝紀に，「（太子であったときの成帝）初居桂宮，上嘗急召，太子出竜楼門，不敢絶馳道，西至直城門，乃絶得渡」がある。
27）前引辛徳勇「西漢至北周時期長安付近的陸路交通―漢唐長安交通研究之一」。
28）『三輔黄図』引く『三輔旧事』。
29）姜波『漢唐都城礼制建築研究』北京：文物出版社，2003年，20ページ，65ページ。
30）『漢書』東方朔伝に「今陛下以城中為小，図起建章，左鳳闕，右神明」とある。
31）国家文物局主編『中国文物地図集・陝西分冊（下）』西安：陝西地図出版社，1998年，366ページ。
32）古賀登『漢長安城と阡陌・縣鄉亭里制度』東京：雄山閣，1980年2月。
33）唐代史研究会編『中国都市の歴史的研究』東京：刀水書房，1988年，9ページ。
34）張継海「漢魏時期的都亭与城市交通」『北大史学』北京：北京大学歴史系，2005年。
35）王毓銓「漢代的亭与鄉，里不同性質不同行政系統説―十里一亭，十里一鄉弁証」『歴史研究』1954年第2期。
36）高敏「論秦漢時期的亭」『雲夢秦簡研究』北京：中華書局，1981年。
37）李遇春「漢長安城建章宮東闕及宮闕研究」『中国文物報』2002年3月8日第7版。

（2014年7月18日掲載決定）



無断転載禁止